

新刊紹介

Abhidharmadīpa with Vibhāṣa-prabhāyitī, ed. by P. S. Jaini, 16 × 24cm, xii + 144 + 498p., Patna, 1959

かねて出版を豫告されていた學界未知の阿毘達磨文獻 *Abhidharmadīpa* が、その註釋 *Vibhāṣaprabhāyitī* を併せて Tibetan Sanskrit Works Series の第四卷として刊行された。校訂者はロンドン大學 School of Oriental and African Studies のパーリ語・佛教梵語講師 P. S. Jaini 氏である。

一九三七年 *Rāhula Saṅkṛityāyana* 師によつてチベットで發見されたこのテキストの原寫本は、不幸にして甚しい不完本で、全一五〇葉の中六三葉、すなわち、四割強が存するに過ぎぬものであつた。他に寫本の發見されたものもなく、チベット譯・漢譯も知られていないからこの寫本はまさに天下の孤本ともいふべきものである。そのような不完全な孤本の解讀訂正の作業を、直接原本に接する

便宜すらなく、ただラーフラ師が撮影し持ち歸つた寫眞のみによつて、遂行した校訂者の勞苦は察すべきものがある。幸いに寫本は極めて優秀なもので、ほとんど訂正を要しない程であつたし、またその内容が、下に述べるように、阿毘達磨俱舍論のそれと極めて密接したもので、校訂者は荻原本 *Yāsamitra* 疏及び P. Pradhan 校訂梵文俱舍論（未公刊）ただしその前半第四業品までが最近刊行されたと聞くを参照することによつて校訂の業を了えることができた。

全文偈頌より成る *Abhidharmadīpa* は、もともととすくなくとも千二百偈程の分量を有したと思われるが、現存するのは總計五九七偈であり、したがつて、註釋 *Vibhāṣaprabhā* もそれだけの偈に相當する部分が存するにすぎないが、それでも今回のジャイニ氏校訂本で四三二頁を占めているのであるから、もし完本が存しておればまず俱舍論の二倍を越すであろうと思われる大部な論書である。

その内容は、正統派の立場から説一切有部の教學説を體系的に述べたもので、その中に世親の俱舍論の説を強く批判し

ている。その點で衆賢の阿毘達磨順正理論や阿毘達磨藏顯宗論と同じ性格のものである。全體を八章に分かつ點も俱舍論以來の仕方を踏襲している。（最後が第八定品の中途で切れているので斷言はできないが、もちろん、順正理論や顯宗論と同じく、俱舍論の破我品に當るものはなかつたと思われる。）

Abhidharmadīpa の中の一々の偈をとりあげてこれを俱舍論の各頌と比較して見ると、*Dīpa* 中の偈のほぼ半数はそれに相當した偈を俱舍論中に見出すことができ、俱舍論中の偈の大部分が *Dīpa* の中に、その相當偈を有する、といった關係にあることがわかる。*Dīpa* の各章 (*adhyāya*) に現存する偈の數は左表の如くである。

I	Skandha-āyatana-dhātu	71偈
II	Indriya	78
III	Lokadhātu	4
IV	Karma-	105
V	Anuśaya	125
VI	Mārga	92
VII	Jñāna	58
VIII	Samādhi	64

これによつて明かなように、最も缺失の多いのは第三世間品でわずかに最後の四偈分、寫本にして一葉片面を存するのみであり、最も完全に近い形で存しているのが第五隨眠品である。この品では最後の一部分が失われたのみで八割強が現存している勘定になる。

Dipa も註釋 Vibhāṣāprahavṛtti も作者が知られていない。しかし、ともかく同一人の手に成つたものと、校訂者は推測している。——ただ、その論據として校訂者が明示するのは、Dipa の所説を Vṛtti 中で解説する際第一人稱の主語 vāyam を用いているというような點だけであるが、そのような言葉遣いは俱舍論を註釋する Yaśomitra Ṡ Vyākhyāna 中にも見られるから、それだけでは論斷するに不十分であろう。校訂者は更に、Dipa 及び Vṛtti の著者と順正理論及び顯宗論の作者たる衆賢との關係を考え、前者はおそらく後者の學說の後繼者であろうと推斷する。Dipa 及び vṛtti の内容が衆賢の二著のそれと極めて類似しているのに、その作者を衆賢と同一人に見

做し得ない理由として校訂者が擧げるのは、(1)衆賢の關する傳承の中に Dipa のことを言わぬ、(2) Vṛtti の中に Dipa の作者の他の著作として Tattvasaṃgraha という書に言及するのに順正理論・顯宗論については何も語らぬ、という二點である。そこで Dipa 及び Vṛtti の作者は衆賢その人ではないが、世親の俱舍論の所説を反駁して正統カシュミラ有部の立場を宣揚した衆賢の態度を繼承した人と考えられ、校訂者は西域記にその名の見える Vinālanitra をそれに擬して、その年代を 450—550 A.D. 或はその少し以前と推定する。この Vinālanitra とのアイデンティフィケーションは積極的な論據に乏しいから、そのまゝは受入れられないように思われるし、Dipa と Vṛtti とが同一人の著作であるかどうかもお問題ではあるけれども、Dipa と Vṛtti が衆賢と同一の系統に屬する人の手に成つたということはおそらく動かせないところであろう。作者を推定する上で suggestive だと思われるのは Vṛtti が八句義説に言及していることである。すなわち、刊本第四頁(寫本 31a)に、

vyākhyātān aṣṭau padārthān saṃskṛtān pañca trayasāsaṃskṛtān/ (八句義、すなわち五有爲と三無爲、はずでに説明された)、とある。校訂者も脚註しているように、これは明らかにその前の箇處において八句義が説かれていることを示すものである。残念なことに、テキストはこの直前數十頁分(寫本においては第 2—30 葉)を全く缺失しているので、その八句義記の詳細を知ることができないが、それが入阿毘達磨論に見える八句義の説と同一のものなることは疑いない。この五蘊三無爲を合せて八句義と數える仕方は、われわれの知る限り、入阿毘達磨論以外の何れの有部論書にも見えなかつたものであつて、今ここにそれを見出すのは甚だ興味深い。入阿毘達磨論は漢土に傳えられた傳承では塞犍地羅に歸せられ、その塞犍地羅(或いは塞犍陀羅)がまた悟入と同一人とされているのであるが、この傳承には不審が多い。チベット譯入阿毘達磨論は作者の名を示していないし、チベット譯にのみ傳えられる入阿毘達磨論註もこの論の作者について何も語らない。論の内容もいわゆる新薩婆

多の教説と必ずしも一致しない。そのような入阿毘達磨論と Yiti とに教系上關連が認められるとすれば興味深いことである。

校訂者は、百頁に餘る長文の序論の中で、この論書の概要を興え、教系を論じ教説上の問題點を究明している。その論旨には教えられるところも多く、また納得しかねる點もあるが、今それらに觸れ得ないのを遺憾とする。(一九六一・六

・一〇・病床にて 櫻部 建)

安樂庵策傳

關山和夫著

落語や講談は、近世庶民の生活に浸透し、その精神生活に多大の影響を興えていた。近世庶民の精神生活を明らかにするために、當然その研究がなされねばならないのであつた。が従来はややもすると、そういうことがなおざりにされ、輕視されるというくらいがあつた。安樂庵策傳(一五五四—一六四二)は、笑話集『醒睡笑』の著者で、落語の始祖として知られてはいた。が實のところその策

傳は如何なる經歷の人であるかは殆ど研究はされていなかったのである。

本書は「宗教家としての策傳」「茶人としての策傳」「咄家としての策傳」「文人としての策傳」「晩年の策傳」

「安樂庵策傳略年譜」からなり、策傳の姿を確實な資料によつて各角度から浮彫りにしている。策傳は單なる一個の咄家であつたのではなく、博學多才の人であり、かつ各界第一級の名士と交りをつなぐ文化人であつたことが知られる。

本書の記述はかなり平易にくだいてあるが、研究書としての態度は、堅持せられていて、多くの學的新見も提示されている。中でも、(イ)策傳は金森定近の子であり、金森法師(長近)は兄である、(ロ)平林平太夫は策傳の自稱であつて、俗名でない、(ハ)策傳は西國地方に七カ寺を創建、再興した、(ニ)策傳は茶の湯を古田織部に習つた、諸書に金森宗和門とするのは謬説である、(ホ)『醒睡笑』駁文の内容は板倉重宗をさすのでなく、重宗の嫡男重郷のことであるとするなどは、注目すべき新見である。著者は多年にわたつて策傳ゆかりの各地を探訪し、新資料の發

見につとめるとともに、從來知られてゐた資料をも再検討し、そこから着實に論證しているのである。その學的態度と學的成果は高く評價されねばならない。なお策傳が近世初頭のすぐれた文化人の一人であつてみれば、そういう人の生き方如何という觀點に立つて本書を見て、興味があり、教えられるところも多い。

本書には「咄の系譜」という附篇がある。附篇では、策傳につらなるものとしての上方落語と江戸落語について述べている。江戸落語について殊に詳しく、鹿野武左衛門から三遊亭圓朝までをあつかひ、芝居と咄との關連をも説いている。これは附篇とはいへ、かなりの紙數にわたる力のかもつた研究である。ともあれ本書は、未開拓の「咄」の始祖策傳の新研究であるとともに、咄の系譜の研究であつて、近世の庶民文化史の重要な一面を解明した好著である。『醒睡笑』の内容研究には深く立ちいつていないが、これは他日増補せられることであろう。なお著者は、本學の卒業生(昭和二十七年)で、現在、愛知縣立一宮高校に勤務している。